

## 『ダロウェイ夫人』の配色における考察

小野 和子

### 1. はじめに

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941)は、新しいタイプの小説を試みて、『ダロウェイ夫人』(*Mrs. Dalloway*)を執筆したが、橋口によれば、美術評論家であるロジャー・フライ(Roger Fry, 1866-1934)と、ブルームズベリー・グループの一員として親交があった(8)。ウルフは、彼の死後、『ロジャー・フライ伝』(*Roger Fry :A Biography*)を執筆しており、彼がイギリスに紹介した後期印象派は、絵画はもちろん、文学やあらゆる分野に影響を与えたと記述している。

The new movement was not to be restricted to the art of painting only. Some of the young French poets were invited to read aloud from their work. He lectured both upon poetry and upon painting himself. He arranged concerts. The fashionable and the aesthetic rubbed shoulders at those parties. Post-Impressionism had become, he noted, all the rage. (180)

フライは、「審美論」“AN ESSAY IN AESTHETICS”において、画家が鑑賞者の感情を引き起こすことを、「デザインの感情的要素」“the emotional elements of design”(15)と呼び、色彩は情感に訴える効果があるとして、“A fifth element is that of colour. That this has a direct emotional effect is evident from such words as gay, dull, melancholy in relation to colour.”(16)と著述している。ウルフの作品に対する後期印象派の影響は、様々な評論を生み出しているが、蜂巢は、訳者あとがきにおいて、「フライの考えるvisionは単なる「視覚」ではなく、「美的感情」であり、それを支えとしてデザインという知性が存在し、その調和が優れた芸術作品を生み出すと唱えた。」(328)と述べている。また、石井は、ウルフは、後期印象派絵画に関心を寄せていた美術評論家のフライと文学と絵画で異なるが、芸術上の交流があり(43)、生と死は、相互に全うし合って後期印象派の掲げる色と形から成るデザインが生まれている(49)と述べている。また、Diasも、ウルフは、フライの影響を受けてモダニズム小説を創作した、“Woolf created her own theory of writing similar to Fry’s theory of art, expressing them in “Modern Fiction” and then putting them to practice in her novels.”(31)と述べている。

丹治は、物語の展開は、あらゆる過去の一日が充満した現在の一日を、老いゆかざるをえない人間の悲哀を美しくうたいあげていると述べている(372,380)。後期印象派の絵画のごとく、多数の配色による色彩表現が見られるが、本稿では、英語圏に普遍的なそれぞれの色彩の表す意味を調べ、各々の色彩の持つイメージが象徴する意味をストーリーの流れの中から考察する。また対比的に配色のなされていない感性的な言葉の表現から作者の意図を類推することにより登場人物の内面描写に、後期印象派の色彩の配色がどのように効果的に融合しているかを先行研究も参考にしながら焦点を当てて考察する。

## 2. 「生」と「死」のテーマを象徴する配色

丹治は、ウルフは、第一次大戦後の生命力にあふれる美しい季節である六月を設定したと述べている(371,372,373)。ウルフは、女主人公クラリッサ・ダロウェイ(Clariissa Dalloway)を中心として、「死」の影を帯びながらも、「生」を希求するそれぞれの登場人物の生と死の生き様を、過去と現在の時の流れにまかせながら壮大な構想のもとで執筆している。色彩の配色から、「生」と「死」のテーマに関して茶色・緑色・灰色と黒色・白色を選択し、文脈により作者の内面描写の象徴を類推することを試みる。

Blair は、ウルフの小説を“literary impressionism”と呼び、“Woolf’s relationship to art was almost one of competition—she admired and simultaneously struggled with what these innovations in the art world meant to her as literary artist.”(1)と述べているが、挑戦とも言えるウルフの後期印象派的文学の考察を試みる。

### 2の① 茶色

幸重は、作者であるウルフは完全な無神論者であったわけではなく、「木には神が住んでいるので伐ってはいけない」というセプティマス・ウォレン・スミス(Septimus Warren Smith)の思いを通して、民間土着信仰的な要素が垣間見えると述べている(94)。また、Hudock は、自然世界を前面に描写する傾向を指摘し、特に木々に注目している。

Many critics have written about Virginia Woolf’s penchant for the natural world and its placement in the foreground rather than the background of her works.  
(239) Woolf appears to use trees as metonymic for the whole of nature. (243)

木々に対する描写は多く、クラリッサの想いは、「死後も木々の一部となって生き残る」“... she being part, she was positive, of the trees at home;...”(9)。また、ピーター・ウォルシュ(Peter Walsh)は、「空と木々の間から作られたこの姿」“this figure, made

of sky and branches”(63)と内声しているように、木々に対する描写は、この小説のテーマである「生」に対する源であり、命を永らえる年輪のごとくこの小説を貫いて描写されている。また、Wyler は、茶色に関連するものとして木を挙げている、“a tangible and/or perceptible association families . . . brown . . . wood”(150)。茶色が女主人公の夫であるリチャード・ダロウェイ (Richard Dalloway) と、彼女に生に対する啓示を与えるセプティマス・ウォレン・スミスに配色されているので、文脈により茶色の象徴することを考察する。

まず茶色は、ミリセント・ブルートン (Millicent Bruton) の昼食会に招かれたリチャード・ダロウェイの目の描写に配色されている。「ミリー・ブラッシュは、彼の茶色の目の奥深くにあるものを見てとった」“Milly Brush saw that; saw a depth in the brown of his eyes . . .” (117)。また、リチャードは、クラリッサはピーター・ウォルシュと結婚しなくてよかったとしばしば言っているように、クラリッサの性格は弱いということではないけれど彼女には支えが必要だと内声する。

But she often said to him that she had been right not to marry Peter Walsh; which, knowing Clarissa, was obviously true; she wanted support. Not that she was weak; but she wanted support. (128)

Perazzini は、“Virginia Woolf, it is common to say, wants to render the feel of moment-by-moment existence...”(406)と述べており、クラリッサは、日常生活を木にたとえ、「幸福な瞬間を人生の木に芽生える蕾」“how moments like this are buds on the tree of life”(31)と内声し、リチャードに対して、「人生の木を支えている基盤である」と、夫に非常に感謝し尊敬している、“above all to Richard her husband, who was the fountain of it”(31-32)。また、クラリッサには、心の奥底に恐怖感が存在しており、しばしば突然の恐怖に襲われるが、リチャードのそばにいれば、鳥のようにうずくまって、次第に生きている感覚を取り戻して、枯れ枝と枯れ枝を互いにこすりあわせて、測りえないほどの大きな歓喜を燃え上がらせることができるので、夫リチャードのおかげで生きることができたと思うのである。

Then (she had felt it only this morning) there was the terror; . . . there was in the depths of her heart an awful fear. Even now, quite often if Richard had not been there reading the *Times*, so that she could crouch like a bird and gradually revive, send roaring up that immeasurable delight, rubbing stick to stick, one thing with another, she must have perished. (202-203)

また、クラリッサは、鳥にたとえられ止まり木に止まっているように描写されている。

“There she **perched**, never seeing him, waiting to cross, very upright.” (4)。以上のような文脈からの考察により、夫リチャードは、茶色が象徴するように、クラリッサを支える木にたとえられ、妻クラリッサは、止まり木で命を吹き返す鳥にたとえられていると類推できる。

茶色は、セプティマスの描写にも配色されており、「鼻が鳥の嘴のような形をした男で、茶色の靴に、みすばらしい外套、その**薄茶色の目**」と表現されている。

Septimus Warren Smith, . . . beak-nosed, wearing **brown shoes** and a shabby overcoat, with **hazel eyes** . . . (15)

for he wore **brown boots**; . . . **eyes** merely; **hazel**, large; . . . (92)

セプティマスは、茶色の類似色である薄茶色の目と茶色の靴で描写されているので、直接的でなく、間接的に女主人公に影響を与えると類推できる。パーティで、彼の自殺の話を聞いたクラリッサは、自分が自殺した青年に似ていると思い、彼が生命を投げ出してしまったことを、うれしく思い、心の鉛の輪が空中にとけてゆくような想いを抱く。

But what an extraordinary night! She felt somehow very like him—the young man who had killed himself. She felt glad that he had done it; thrown it away while they went on living. The clock was striking. The leaden circles dissolved in the air. (204)

セプティマスは、シェルショックを患っている青年であり、盟友の死により、突然の恐怖に襲われるようになるが、クラリッサも、妹が事故で目の前で死んだ体験から突然の恐怖を心の底に抱いている。彼女は、セプティマスの自殺に自分の分身を見たのではないだろうか？ クラリッサは、セプティマスの死から、啓示を受け、心の鉛の輪、すなわち、わだかまりを溶かし、生まれ変わった女性として生きようとしていると思われる。

Dias は、ウルフの文学と絵画の結びつきに、後期印象派とキュビズムを指摘している。

She incorporates both the emotional elements of post-impressionism and the fragmented methods of cubism to create her own representation of life.(22)

A strong connection can be seen between this writing and the kind of artwork produced in the Cubist and Post-Impressionist style. Post-impressionist work is based more on feeling than visual fact, and is more personally expressive

than it is visually realistic. Through light and color, an abstract work is produced that has a scene of movement and change. (23)

ウルフは、キュビスムの絵画のようにセプティマスの鼻に、鳥の嘴のような形を与えることによって、鳥に形容されているクラリッサと類似点を持ち合わせていることを暗示している。また、色彩では、薄茶色の目と茶色の靴と配色している。「生」の源である木々を象徴する類似色の薄茶色“hazel”が目に配色されていることからクラリッサの「生」に間接的に貢献する、すなわち生きることへの啓示を与える役割と、茶色の靴は体の下部に履く靴であることから、彼女の生きることへの礎となる役割を与えられているのではないだろうかと類推できる。生の源である「木々」の象徴である茶色と薄茶色のセプティマスへの配色は、女主人公の生きようとする生への希求を間接的に支えるものであり、生を与えるものであると類推できる。

## 2. の② 緑色

赤池は、緑は山野の草木の色であり若芽の色であり、嫉妬深さ未熟さを表す色であるとともに生命の躍動する、活気みなぎる、若さの象徴の色であると述べている(103,105,108,114)。これを参考にして、物語の流れに沿って緑の象徴するプラスイメージとマイナスイメージの考察を試みる。生の源である木々から生まれる木の葉の描写は、木々同様に多数あるが、木の葉の色彩は、普遍的に緑色であり、「生」そのものを象徴している。Showalter は、女性の衣服描写によく用いられている緑色に注目して、クラリッサの娘エリザベス(Elizabeth Dalloway)のドレス“like a hyacinth, sheathed in glossary green”(134)、パーティの客ナンシー(Nancy)のドレス“dressed at enormous expense... a green frill”(195)、セプティマスの想い人のドレス“Miss Isabel Pole in a green dress walking in a square”(94)を列挙している。また、クラリッサが、店頭で愛でた、「海のような緑色のブローチ」“their lovely old sea-green brooches”(5)や、彼女のパーティドレスの「銀色っぽい緑色のドレス」“a silver green mermaid's dress”(190)などを、列挙しており、緑色の象徴する女性の生命力を賛美している。(p.xxxi)

その他、緑色は、「生」への象徴として、主要人物に配色されている。クラリッサについての描写では、冒頭で、鳥にたとえて「青緑色の軽やかで活発なカケス」“blue green, light, vivacious,”(4)、また自宅に戻ってからは、戸外から差し込む「緑色の光」“the green lights”(32)、他にバスルームの「緑色のリノリウム」“the green linoleum”(33)などに緑色は使用されており、クラリッサのほとばしる生命力を象徴している。

セプティマスについては、前述のように、従軍以前は緑色のドレスをまとった女性に

恋することは、彼が緑色の象徴する生命力に溢れた青年であったことを暗示している。精神科医サー・ウィリアム・ブラドショウ(Sir William Bradshaw)を訪ねる前の公園のベンチは「木の下**の緑色**のベンチ」“the **green** chair under the tree”(72)と描写されているので、セプティマスは、精神科医の治療を受ける前は、まだ、「生」の兆しが見られたことが表現されている。最後に自宅を訪ねてきた精神科医から逃れようとして、二階から飛び降りて自殺する前の、妻ルクレティア(Lucrezia)との和やかなひと時には、部屋の蓄音器のラッパが、「**緑色**のラッパの付いた蓄音器」“the gramophone with the **green** trumpet”(155)と描写されており、セプティマスの自殺の直前の最後の思いは、「最後の瞬間まで待とう、ぼくは死にたくはない、人生はいいものだ、太陽が熱い」“But he would wait till the very last moment. He did not want to die. Life was good. The sun hot.”(164)とあり、自殺はしたが、最後まで生への希求を持ち合わせていたことが、暗示されている。作者は緑色を配色することにより、セプティマスの心の底の「生」への希求を表現している。

ピーターについては、内声の箇所から、「**緑**の海の波」“the **green** sea waves”(62)、またクラリッサと決別した思い出の噴水の「鮮やかな**緑色**の苔」“the vivid **green** moss”(70) 公園の散歩では、「**緑**の美しさ」“the **greenness**”(78)を愛でるが、クラリッサに恋したピーターの溢れる生命力を象徴している。

クラリッサの夫チャールズは、昔暮らした田舎の風景を思い出し、「**緑**の草の葉のカーテン」“... parted curtains of **green** blades”(124)と描写されており、生命力溢れるのどかで健康的な風景が緑色により表現されている。

ミス・キルマン(Miss Kilman)についての、緑色の表現は、「緑色のレインコート」“a **green** mackintosh coat”(12) 及び類似色の「大きな**灰緑色**の目」“her large **gooseberry-colored** eyes”(137)である。赤池は、緑色のマイナスイメージの象徴として、シェークスピアのオセロにより嫉妬心を表すと述べている、“Othello fell under the sway of the **green-eyed monster**.”(108)。ゆえに、ミス・キルマンの場合は、溢れる生命力と共に、彼女とクラリッサのお互いの憎悪心を象徴していると類推できる。また、「死」と隣り合わせであることを象徴する灰色の類似色が使用されていることから、狂信的な信仰心から、「生」を謳歌する豊かな心を持ち合わせず、頑なに神にすぎるミス・キルマンの片意地な生き様が象徴されている。

## 2の③ 灰色と黒色

赤池は、灰色は老年、陰気、病的な青白さ、陰気、絶望的な暗さを表すが、白と黒の混合色であり、混合の度合いによって黒みの灰色や白みの灰色が作れると述べ

ている(182)。また、大西によれば、灰色は支配者階級の人物描写に登場すると述べている(3)。また赤池は、黒は光を全然反射しない色であるから、暗闇や夜を連想させ、古来、死や不吉のシンボルとされてきたと述べている(230)。以上のような灰色と黒色の意味を参考にして、混合色である灰色と黒色の象徴することを物語の流れに従って考察を試みる。「生」と共に「死」がテーマであるこの小説には、死を象徴する黒や、黒に白を混色した灰色は、主要人物を中心として多数配色されている。

セプティマスは従軍により、盟友エヴァンズの死を体験し、シェルショックに陥るが、死と隣り合わせの精神状態が、灰色の色彩により表現されている。盟友エヴァンズが、グレーの服を着て実際にこちらに歩いてくる幻覚を見て、セプティマスは、片手を上げながら叫ぶ。

A man in **grey** was actually walking towards them. It was Evans! . . . ,  
Septimus cried, raising his hand (as the dead man in the **grey** suit came  
nearer), . . . which broadens and strikes the **iron-black** figure . . . (76-77)

グレーのスーツは、セプティマスの盟友エヴァンズの死を悼む死と隣り合わせの心の象徴であり、灰黒色は、セプティマス自身に死が迫っていることを象徴している。

また、石川は、クラリッサはひとつの啓示のように、セプティマスの死を理解し、また、何度もクラリッサによる「もはや恐れるな」で始まるフレーズは、死の意識の暗示だけでなく、クラリッサの死と再生というテーマがひそかに示されていると述べている(21,23)。ゆえに、グレーはクラリッサがセプティマスの自殺から、「生」への啓示を与えられ再生する時の心の変化を、空の色の配色により描写していると思われる。クラリッサは、昔から眠れない夜は、空に自分の心を投影する傾向があり、薄暗い厳かな空を予想していたが、セプティマスの自殺を聞いた直後の空は、灰白色の新鮮な光景と描写されている。

It held, foolish as the idea was, something of her own in it, this country sky,  
this sky above Westminster. She parted the curtains; she looked. ... It will be a  
solemn sky, she had thought, it will be a dusky sky, turning away its cheek in  
beauty. But there it was—**ashen pale**, raced over quickly by tapering vast  
clouds. It was new to her. (203-204)

作者は、夜空の描写を、死と隣り合わせの灰色から、白色を混色した灰白色の色彩で表現することにより、セプティマスの「死」から「生」への啓示を受けた直後のクラリッ



サの感性の変化を表現している。すなわち、クラリッサは、セプティマスの「死」を、セプティマスと類似したわが身の分身の「死」として受けとめ、セプティマスにより、「死」への本性を彼と共に拭い去ることにより「生」を受け入れ、新しく生まれ変わったことを、灰色からより白に近く、死を象徴する黒からは遠い、灰白色の夜空によりクラリッサの心の動きを表現していると類推せざるをえない。

また、グレーは、精神科医のサー・ウィリアム・ブラドショウの描写にも、「グレーの車、グレーの毛皮、シルバークレーのひじ掛け」“as the motor car was **grey**, so to match its sober suavity, **grey** furs, silver **grey** rugs, were heaped in it, to keep her ladyship warm while she waited”(103)のように、グレーが繰り返し使われている。サー・ウィリアム・ブラドショーは、高額な収入を得ており、グレーのプラスイメージは、高級感を漂わせて支配者階級を象徴している。反対にマイナスイメージでは、治療によりセルショックであるセプティマスを自殺に追い込むことから、「死」を象徴していると類推できる。また、治療する部屋は、「壁に何枚かの絵がかけられ、高価な家具がおかれている灰色の部屋である」“There in the **grey** room, with the pictures on the wall, and valuable furniture . . .”(111)。灰色の高級感の漂う部屋であるが、精神を患うセプティマスにとっては、精神の沈む「死」の道に導かれる灰色の部屋でしかないと思われ、「死」の影の象徴となっている。

黒色は、死の直前のセプティマスが目にするものの描写に配色されている。妻は、「黒い服をきた小柄な体」“her little **black** body”(155)と描写され、「死者たちの声や黒い藷草」“the voices of the dead . . . with **black** bulrushes”(159)とあり、自殺する直前の描写であり、彼の死を暗示している。

軍人の娘である老年のミリセント・ブルートンの配色にも使われており、「黒いドレスをまとった彼女は、まるで擲弾兵の亡霊」“Lady Bruton . . . a spectral grenadier, draped in **black** . . .”(197)と表現されており、戦争による死を象徴している。また、ピーターの内声の風景描写から、「黒い壮観な兵士たちの像」“the **black**, the spectacular images of great soldiers”(56)は、死を象徴している。また、エリザベスの描写の箇所から、「一陣の風が吹いて太陽を薄い黒いヴェールで覆い」“a puff of window . . . blew a thin **black** veil over the sun”(152)とあるが、風景描写のそばに軍隊的音楽の描写があるため戦争による死を象徴している。これらの描写は、セルショックのセプティマスの描写と共に、作者の平和への願いが込められていると思われる。

## 2の④ 白色

赤池は、白は白鳥の白であり、雪の白さでもあり、純粹、純潔、明快、潔白、純真、



清浄などを表し、平和と神聖のシンボルでもある。また、白人、蒼白な、暖かさなどの欠けた、無色の、空白の、などの意味もあると述べている(153,154,155)。

クラリッサについては、娘時代の白色のドレスが印象的であるが、彼女は自分自身の内面について、「私の生活の真ん中は、**空虚**な屋根裏部屋である」“**There was an emptiness about the heart of life; an attic room.**” (33) と内声している。また、自分に欠けている性格の本質について顧みて、「心の中心に他者を浸透させないものがある」と内声している。

She could see **what she lacked**. It was not beauty; it was not mind. It was something central which permeated; something warm which broke up surfaces and rippled the cold contact of man and woman, or of woman together. (34)

また、ピーターのクラリッサに対する内声では、「冷淡なところや何か測りしれない、よそよそしいところがある」“**this coldness, . . . something very profound in her . . . an impenetrability.**” (66)。また、彼は想いをはせて、クラリッサは「氷柱のように冷たい」“Clarissa was **as cold as an icicle.**” (88)とも思い、「白いドレスを着て、階段を降りてくる様子」“coming downstairs on the stroke of the hour **in white**”(54)と、印象的に回想する。親友サリーも、「娘時代の**白い服**を着たクラリッサを思い出し、何か欠けていると思う」“**. . . she still saw Clarissa all in white . . . she lacked something.**” (207)クラリッサは、娘時代には、**白いドレス**をまとい、良家の子女として育った彼女の**清純さ**を象徴している。また、マイナスイメージでは、親友思いで、パーティでは、色々と世話をする優しい面を持ち合わせているが、性格の中に本質的に、突然の恐怖に襲われ身体が強張る発作、空虚で何事にも馴染まない堅いもの、そのような**内面の空白と冷ややかさ**を白色は象徴していると類推できる。クラリッサ自身の内声では、娘時代の想いがよみがえり、「ばら色の夕暮れの光のなかで**白いドレス**で正装してサリーに会えるという喜びから死に憧憬の念を抱いたことがあった」ことを思い出す。

. . . with the rooks flaunting up and down in **the pink evening light**, and dressing, and going downstairs, and feeling as she crossed the hall ‘if it were now to die ’twere now to be most happy.’ . . . , all because she was coming down to dinner in a **white** frock to meet Sally Seton! (37-38)

石川は、クラリッサの内面には、生への執着と死の意識が同居していると述べている(17)。

すなわち、普遍的に幸福の象徴とされているばら色の夕暮れが設定されており、**白いドレス**は、サリーへの同性愛にも似た純真な思い、至福の時が永遠であることを願う死への敬虔な憧憬の想いを象徴している。作者独特の死への敬虔な憧憬は、ピーターの内声では、「生への熱狂のくだらなさ」“all this fever of living were simplicity itself”(63)という逆説的な表現に、また、セプティマスの自殺を聞いたクラリッサの思いでは、「一日一日の生活のなかで墮落や嘘やおしゃべりとなって失われてゆくものがあるが、死はそれを守ったのだ。死は挑戦である。死には抱擁がある。」“A thing there was that mattered; a thing, wreathed about which chatter, defaced, obscured in her own life, let drop ever day in corruption, lies, chatter. This he had preserved. Death was defiance . . . There was an embrace in death.” (202)に表れていると思われる。このように、登場人物を通して、作者独特の死への思いや死の選択は、ある意味では、生の希求だとも類推できる。

また、白色は、現在のピーターの恋人デイジー(Daisy)の写真に配色されて、「白ずくめのデイジー」“Daisy all in white”(172)と描写されている。ピーターは、巻末のパーティ会場で、往年の親友サリーと出会い心の内を漏らして、「人は人生で二度恋することはできない」“One could not be in love twice”(210)と語るように、デイジーのドレスの色を、若き日々のクラリッサのドレスの**白色**と重ねることにより、クラリッサは、彼の恋心の琴線を奏でる永遠の想い人であることが描写されている。

また、赤池は、白は上品で高貴な色であり、古代から尊ばれたと述べている(153)。白色は、背景描写として配色されている。早朝のロンドンでは、王族の車両と思われる描写に、「魔力を持った**白く**て丸いもの」“something **white**, magical, circular”(18)とありまた、ストリートの様子に「**純白**のリボンや**白い**リネンの肌着」“**white** underlinen threaded with pure **white** ribbon”(19)や、「**白い**胸あて」“their **white** slips”(19)や「**白い**胸像」“the **white** busts”(20)と描写され、クラリッサを魅了する上質なストリートが描写されている。飛行機の飛ぶ空や町の描写にも、「**白い**煙」“**white** smoke”(21)、「**白い**布に包まれて彼女の腕にしっかりと抱かれている赤ん坊」“... her baby, lying stiff and **white** in her arms”(22)など、白色は多く用いられており、戦後の「生」を謳歌する、人々の崇高な心に溢れている様子がうかがえる。

### 3. 絵画的配色

大西は、ウルフは、絵画的な手法を小説に取り込むことを試みていたと述べている(1)。また、恒川は、E.M.フォースター(E.M. Forster)の講演に注目して、ウルフが詩と小説の融合を目指したことを述べている(1)。その他の色について、暖色系では、ばら色、赤

色、黄色が、寒色系では青など、多くの色が、絵画のように配色されて、この小説に彩りをそえている。これらの色についても考察を試みる。

暖色系としては、まずばら色が多く配色されているが、赤池は、ピンクやバラ色が西洋では健康、希望、明るさの表徴色であると述べている(57,182)。ばら色は、クラリッサの描写では、クラリッサの「繊細な**ばら色**の顔」“seeing the delicate **pink** face of the woman”(40) や、「彼女の小さな**ばら色**の顔」“her small **pink** face”(137)とあり、また、エリザベスの「**ピンク**のドレス」“her **pink** frock”(212)にも配色され、絵画のような美しさが表現されて、母と娘の幸福を象徴している。セプティマスについては、故郷からロンドンに出てきたばかりの時は、「**ばら色**の無邪気な丸顔」“a **pink** innocent oval”(92)と表現されており、希望に満ちた青年であったことが表現されている。

赤池は、赤色は情熱、革命、危険、停止、幸運、威厳、太陽、憤怒、積極などのシンボルであると述べている(28)。また、幸重氏は、太古の歌を口ずさむ老婆の姿は地母神を連想させると述べている(94)が、アスターの花に赤が絵画のように配色されており、「あの幾百万年もの昔に アスターの花の**赤一色**に燃え立っていた幾時代」“millions of years ago, . . . in the course of ages, long as summer days, and flaming, she remembered, with nothing but **red asters**”(89)とあり、清水の花言葉によれば、美しい思い出(140)であり、永遠の愛を歌う情熱と幸福を象徴している。

赤池は、黄色は、一般的に黄金、愉快、快活、希望、おしゃべり、陽気さ、明るさなどを表すが、英米では、特にキリスト教ではキリストを裏切ったユダの衣服であったために、最下等の色として軽蔑を表すと述べており、善悪両面を表徴する両面性があると述べている(77-78)。また、須賀川は、黄色は、‘jealous’, ‘cowardly’の意で、また‘grief’を象徴し、憂鬱や老年をも表すと述べている(78)。ゆえに、物語の状況から黄色の象徴するプラスとマイナスのイメージの意味を考察する。パーティのために花を買いに行ったクラリッサは、帰宅後、寝室で、「羽毛のついた**黄色**の帽子」“her feathered **yellow** hat”(33)をとる。プラスイメージでは、黄色はクラリッサの優美な華やかさを連想させる。しかし、マイナスイメージでは、クラリッサが、黄色い帽子をとる寝室は屋根裏部屋であり、この後、夫リチャードに愛されてはいるが、夫婦生活における彼女の孤独な一面の描写や、また、老いへの嘆きも黄色により暗示的に描写されている。また、パーティの最中、「極楽蝶を一面に散らした**黄色**のカーテン」“Gently the **yellow** curtain with all the birds of Paradise blew out and it seemed as if there were a flight of wings into the room.”(184)が風になびく。プラスイメージでは、豊かさや陽気さを連想させるパーティに関連して、黄色が配色されており、社交的にパーティを催す様子が絵画的に描写されている。反対にマイナスイメージで考察すると、物語の書き出しは、早朝花を買い

に行くというクラリッサの言葉から始まり、自宅でパーティを開くことになっている一日が描かれているので、パーティは、この小説を貫く出来事であり、クラリッサの生き様に重要な役割を果たしている。クラリッサのパーティへの想いについて内声は言う。「私が求めているのはただの人生だけなのです。」“What she liked was simply life.” (133) 「そのためにパーティをするのです。」“‘That’ what I do it for,’ she said, speaking aloud, to life.” (133)。クラリッサは、突然の恐怖という病魔を克服して裕福な環境で「生」を希求し、パーティに意味を見出そうとしている。また、石川によれば、何度もクラリッサにより繰り返される「もはや恐れるな、灼熱の太陽を」のフレーズは、死と再生のテーマを含むと述べているが(21)、Wyler によれば、黄色に関連するものとして太陽を挙げている、“a tangible and/or perceptible association families . . . yellow . . . sun”(150)。太陽のフレーズは、クラリッサが、黄色の帽子を脱ぐ直前に描写されており、ミリセント・ブルートンが、夫リチャードだけを昼食会に呼んだことに、不安をいだき「もはや恐れるな、灼熱の太陽を」“Fear no more the heat o’ the sun . . . ” (32) と心を鼓舞する。また、パーティの最中に、セプティマスの自殺を聞いた後にもクラリッサの脳裏に同じフレーズが浮かぶ(204)。作者は、黄色の配色により、クラリッサの外見の華やかさを連想させると同時に、内面に潜む精神の闇を鼓舞して生きる生き様を、プラスとマイナスのイメージにより、見事に描写している。また、直後に描写されているのは、黄色のカーテンが風になびくのを見るクラリッサの従妹で、年収 300 ポンドしかないのことを気に病んでいるエリー・ヘンダソンなので、彼女の恐怖や臆病や老いも暗示していると思われる。

青色については、赤池は、青は海の青さであり、空の青さでもあり、幸福、希望、誠実、沈着、陰うつ、海洋、消極、沈静などを表わす色でもあると述べており(124)、プラスとマイナスのイメージがあるので、物語の状況から各々の青色の象徴する意味を考察する。精神科医のサー・ウィリアム・ブラドショウには、青い目 “blue eyes”(200)が配色されているが、ピーターが、「いかさま師」“damnable humbugs”(212)と呼んでいるように、マイナスイメージであり、患者たちを陰鬱な世界に追い込む事を象徴していると類推できる。また、セプティマスの妻のルクレイツィアには、「律儀そうな淡青の目」“her honest light-blue eyes”(165)と表現されており、プラスイメージの誠実さが表現されている。

また、多くの配色により、読者が、まるで美術館で絵画を楽しむかのように絵画的で色彩豊かな描写が、物語の合間になされており、「生」と「死」の無常がテーマの小説に美しさを添えて格調高いものにしている。早朝にクラリッサが、訪ねる花屋の多彩色の花々の描写(13-14)、リチャードが想いをはせる緑色と空の碧さを基調にした田舎の風景

描写 (124)、エリザベスの愛でるロンドンの夕暮れの光と影、これを自殺直前のセプティマスもながめるのだが(152)、作者は、万華鏡のように多彩な色彩を配色して、移ろいゆく生きとし生ける者の「生」を称賛し謳歌している。命あることの尊さと大戦後の平和をいつくしむ作者の溢れ出る想いが、至福のような色彩の配色を創造し、読者を魅了せずにはおれない。

#### 4. 無配色による感性の表現

「生」と「死」のテーマで貫かれるこの小説の始まりは、女主人公クラリッサの若き日々の感性の内声、ピーターへの想いから始まる。感性的な自然描写、早朝の清浄な空気が、光、風、海と感覚的な音からの瞑想であり、彼女の若き日々が浄化された感性のみの心の言葉、“fresh,” “solemn,” “Peter Walsh,” “his eyes,” “his smile,” “his grumpiness” (3)である。意外なことに色彩の配色がなく、モノトーンの色彩でもない、表現されているのは、無配色である。無配色における感性的な表現は、色彩による視覚的で絵画的な調和を生ずるのとは対比的に、言葉の持つ感性そのものの表現であるとも言えるであろう。物語の始まりの無配色は、絵画的に鑑賞的に追憶するのではなく、クラリッサの心に同化している感性そのものであり、ピーターとの感性的な心の交流が、読者の感性を呼び覚まさせずにはおれない。反対に、物語の終わりは、ピーターの内声であり、「ぞっとする程の恍惚感と興奮に満たされた」心の言葉、“ecstasy,” “excitement,” “Clarissa”と表現されて彼女と同化したピーターの感性そのものである。

What is this terror? What is this **ecstasy**? He thought to himself. What is it that fills me with extraordinary with extraordinary **excitement**?

It is **Clarissa**, he said.

For there she was. (213)

ピーターは、若き日々、クラリッサに熱烈に恋愛感情を抱き、成就されないままに彼女から去るが、パーティの催される当日の昼頃に、クラリッサの屋敷を訪問し、彼らは再会する。年月はピーターの心のわだかまりを癒し、かつては批判的であったクラリッサのパーティに喝采を贈る心を養い、彼女を感性の中に受け入れるのである。そこには、色彩の配色はなく、ピーターの感性そのものが描写されている。また、作者は、ピーターの容姿を、巻末に近いパーティ会場で、エリー・ヘンダソンという老年の女性の目を通してリチャードと談笑する場面として描写しており、「あの男の人の顔には見覚えがあり、中年の背の高い男。美しい目をして、浅黒く、眼鏡をかけていて」“Ellie Henderson thought, watching them go, certain she knew that man’s face. A tall man, middle

aged, rather **fine** eyes, dark, wearing spectacles . . .” (186)とあり、全編に渡りクラリッサへの想いを彼の独特の人生観と共に内声により語ってきたピーターの容姿が、まるで読者に種明かしでもするように巻末で間接的に投影的に影のように表現されている。色彩は、肌の浅黒さのみであり、目には配色がなされず**美しい**という感性的な言葉で表されているのみであり、クラリッサにとってピーターは、感性そのものであることが暗示されている。クラリッサ自身もピーターを「魅力的」“... he's enchanting! perfectly enchanting!...”(45)と思う表現がなされている。クラリッサにとって、ピーターは、感性の中に同化された心を通わす対象であり、年月を経て彼らの心には、恋愛感情を凌駕して通いあう感性そのものがいつくしまれたのである。

## 5. まとめ

色彩の観点から『ダロウェイ夫人』を考察すると、「生」と「死」がテーマであるこの小説には、主軸として「生の源」である木を象徴する茶色、「生そのもの」を象徴する緑色、「死」に関する灰色と黒色、「クラリッサ」を象徴する白色と配色し、それに多彩な色彩を加えて、絵画を描くように執筆されており、「死にゆく運命」の避けられない人の世の宿命を、「生」の歓喜と尊さを、ウルフは、冷静な熱情で美しく詩人そのものの心で執筆している。しかし、対比的に物語の始まりを、無配色の感性的な言葉で紐とき、同様に物語の終わりをただ感性のみ言葉で閉じている。物語の始まりは、女主人公クラリッサの若き日々が“fresh,” “solemn,” “Peter Walsh” (3)のような浄化された感性のみの心の言葉で語られ、物語の終わりは、“ecstasy,” “Clarissa” (213)のような、ピーターの感性のみの心の言葉で語られる。年月を経て心が浄化され、葛藤が凌駕されていく心情の変化の描写が配色と無配色により見事になされている。『ダロウェイ夫人』は、登場人物の内面描写を目指したウルフの傑作であり、知性豊かな見事な構成とたおやかな詩人の感性に畏敬の念を抱くばかりである。

## 引用文献

- Blair, L. (2010). “Virginia Woolf and Literary Impressionism” University of Washington Tacoma. School of Interdisciplinary Arts and Sciences.
- Dias, C. (2006). “Pieces of Virginia: Post-Impressionaism and Cubism in the Works of Virginia Woolf” Bridgewater State University. 2(9), 22-31.
- Fry, R. (2017). *Vision and Design*. The Project Gutenberg EBook of Vision and Design, by Roger Fry.
- Hudock, S. (2007). “‘Man Must Not Cut Down Trees’: Septimus Smith’s Madness of



- Nature”. The Image of Violence in Literature, Media, and Society II. Pueblo, CO: Society for the Interdisciplinary Study of Social Imagery, Colorado State University-Pueblo, 307, 239-49.
- Perazzini, R. (1977). “*Mrs. Dalloway*: ‘Buds on the Tree of Life’ ” The Midwest quarterly: a journal of contemporary thought. 18(4), 406-417.
- Showalter, E. (2000). “Introduction.” *Mrs. Dalloway*. London: Penguin.
- Woolf, V. (2000). *Mrs. Dalloway*. London: Penguin.
- Woolf, V. (1940). *Roger Fry A Biography*. New York: Harcourt, Brace and Company,
- Wyler, S. (1992). *Colour and Language: Colour Terms in English*, Gunter Narr Verlag Tübingen, 1992.
- 赤池鉄士 (1981) 『英語色彩の文化誌』, 研究社, 東京.
- 石井康一 (1974) 「後期印象派と V. ウルフの小説」『文芸と思想』福岡女子大学 (38), 43-52, 1974.
- 石川玲子 (2008) 「ヴァージニア・ウルフが描いた「生」のかたち…クラリッサ・ダロウェイの死生観から」『相愛大学人文科学研究研究所研究年報』 (2), 12-24, 2008.
- ウルフ、ヴァージニア (2018) 『ダロウェイ夫人』, 丹治愛 訳, 集英社, 東京.
- ウルフ、ヴァージニア (1940) 『ロジャー・フライ伝』, 宮田恭子 訳, みすず書房, 東京.
- 大西祥恵 (2010) *Mrs. Dalloway* における色使い」『英語英米文学論輯』京都女子大学 (9), 1-14.
- 清水晶子 (2011) 『誕生日の花図鑑』, ポプラ社, 東京.
- 須賀川誠三 (1999) 『英語色彩語の意味と比喩』, 成美堂, 東京.
- 恒川正巳 (2007) 「灰色の世界:E.M.フォースター『ハワーズ・エンド』論」 IVY (40), 1-18.
- 橋口稔 (1989) 『ブルームズベリー・グループ』, 中公新書, 東京.
- フライ、ロジャー (2019) 『ヴィジョンとデザイン』, 蜂巢泉 訳, 水声社, 東京.
- 幸重美津子 (2003) 「Milton’s Bogy の向こう側—ヴァージニア・ウルフのミルトン観についての一考察—」『英語英米文学論輯』京都女子大学 (2), 91-107.